



知世は子猫を抱いて眠る



コーラス部でソロパートを歌う知世は、たまに個人練習の日があつて、帰宅がとて遅くなる。そんな日は母の言いつけで迎えの車に乗って帰るのだが、車窓を眺める知世の目に女の子の姿がふと止まったのは、知世流の直感によるのかもしれない。

「運転手さん、ちょっと車を止めていただけますか？」  
そついつて車から降りて、すっかり夕闇に覆われた公園のベンチに駆け寄る。その女の子は、顔を膝につずめてうずくまる姿勢でベンチに座っていたが、髪形で誰かすぐにわかった。やはり毎鈴だった。

「あらあら」知世はしゃがんで声をかける。「どうなさいましたの？」

毎鈴が顔を上げる。泣きはらしたのか、目が真赤だった。

「あらあら…」

「お風呂が湧いておりますわ。場所はメイドがご案内します。」

泣く毎鈴を強引に車に乗せて大道寺邸まで連れて帰ってきた知世は、有無を言わせぬ口調で小さな賓客のもてなしを開始する。不意の客だが、そもそも知世がお客さんを連れてくることは滅多にないので、メイド達も張り切っているようだ。

「体がすっかり冷えてしまったでしょうから、まずはゆっくりにお湯につかって暖めるとよろしいですわ。お食事はそのあとにしましょう。お家の方には私から連絡しておきますわ」

「…なんだか、悪いわ」精いっぱい笑顔をふりまく知世と対照的に、尊鈴は口数も少ない。

「あら、今日は母の帰宅が遅い日なんですの。尊鈴ちゃんも帰ってしまうと、わたくし、一人で食べなければならなくなってしまいますわ。でも、御都合がどうしてもお悪いようでしたら、無理にお引き止めは出来ないのですけれど…」

強く固辞する理由も気力も今の尊鈴にはなかったたので、勧められるままに従うことにした。

大道寺邸の広い湯船に一人でつかりながら、尊鈴はその日の出来事を思い返してみる。

「なによ小狼！ 私の気持ちなんて全然わかってないくせに！」

手でお湯をすくいながら、最初に怒鳴ったのは自分の方だった気がすると尊鈴は思った。でも、怒鳴るような原因を作ったのは小狼の方だ。平気であんなこと

をするなんて、ちっともわかってない。こんなに小狼のことが好きなのに、全然わかってない。

私ってそんなに、小狼に嫌われる理由があるんだろうか。すぐに思いつくのは、魔力がないこと。だからクロウカード集めの手伝いができない。だって仕方ないじゃない。そういう風に生まれちゃったんだから。でもそれで、いつも邪魔者扱い。

ないのは魔力だけじゃない、そう思いながら尊鈴は、水の中でゆらゆらと揺れる自分の肢体を見下ろす。まだ子供のままの、素のままの、やわらかな曲率の曲線。小狼は格好いいお姉さん達の中で育つてるから、自分みたいな子供はそもそも眼中にないのかもしれない。早く大人になりたい。でも大人になっても、小狼に気に入ってもらえるような素敵な女性にはなれないかもしれない。だから小狼は私のことが気に入らない。気に入ってもらえない。

「やっぱり私は、駄目な女の子なのかな…」

涙の雫が水面に落ちて広がり、見えない悲しみの色に染める。

知世の希望で、食卓は特に来客用には飾られず、大  
道寺家で普段食べているような品々が並べられた。圓  
美がないので、旬の野菜が主である。熱の通りが絶  
妙な冬の茅キヤベツはとても甘くておいしい味だっ  
たが、あまり贅辞を述べるような気分ではなかったか  
ら、苺鈴は特に何も言わずに食べた。知世もそんな苺  
鈴の心境を察しているのか、給仕をするメイドに向  
かって「今日のお料理は特別にいいですね」など  
と話しかける以外は無言で、ほとんど苺鈴に構わな  
かった。それでも時折、苺鈴の方を向いて、まるで苺  
鈴が食べてくれていることが最高の贅辞であるかのよ  
うに、にっこりと笑った。

「今晚、泊まっていますよ。」  
料理をあらかた食べ終えたとき、知世が不意に尋ね

た。

苺鈴にとっては願ってもない話。しかし、いちおう  
尋ね返す。

「いいの？」

「はい。実はもうお家の方には連絡してあります  
わ。」

「じゃ、泊まってく」これで、とりあえず明日まで顔  
をあわせずに済む。それだけで、苺鈴は少しほっとし  
た。

夕食のあと、二人は知世の部屋に引きこもった。苺  
鈴はビデオ鑑賞でも何でも知世の趣味に付き合う覚悟  
でいたが、知世の方は「どうぞこの部屋にあるものは  
お好きに使ってくださいね」といって、一人でお裁縫  
を始めてしまったから、苺鈴は本棚からハードカバー  
の小説らしきものを一・三冊とりだしてばらばらとめ  
くった後、結局はソファに座ってぼんやりと知世を眺

めることにした。

知世は何も言わずに、ピンクの布と真っ白なふさふさの玉を器用にちくちくと縫いつけて、控え目に言っても「派手」な衣装を仕立てていた。苺鈴はそれから少し離れて、やはり何も言わずにソファのうえで膝を抱えて座っていた。時折知世がかたかたと裁縫箱の中から糸だの針だのを取り出す音をたてるのを除けば、部屋は静まりかえっていて、まるで雪の降る夜のようにだった。

「それ、木之本さんの服？」

苺鈴が不意に話しかけた。

「はい」知世は手を休めずに答える。

「いつもそっやって作ってるの？」

「毎日というわけにはいきませんわ。でも、さくらちゃんや晴れの舞台で身につけるものですから、出来るだけ手をかけるようにしていますの」

「あっそ」苺鈴は知世に背を向けて、柔らかなソファ

に体を延ばして横になる。

ふたたび沈黙の時間が流れた後、大道寺邸のどこかの時計が鐘を打つ音がかすかに聞こえた。

「そろそろ休みましょつか」知世は裁縫道具を片付けながら言う。

「寝室は隣ですわ。」

「あたし、ここでいい」苺鈴は知世に背を向けたまま言った。

「セミダブルですから私達一人が眠るには十分ですし、一緒のベッドがお嫌でしたら来客用のお部屋もありますけど？」

「ありがとう。でもここでいいの。そっという気分なの」

「そうですか…」知世はそっ言っって、隣の寝室へと入っていった。

しかし、知世には別の考えがあった。寝室から毛布を何枚か持ってすぐに出てくると、部屋の反対側から

もう一組のソファをずるずると引っぱってきて、母鈴の隣に横つけた。ちょうど女の子二人分の広さの、背もたれに囲まれたふかふかのお城が出来あがる。

「なにしてるのよ」

「わたくしもここで眠りたい気分なのですわ。お気に触りますか？」

「…勝手にすればいいわ」

ソファのうえに毛布を広げて、知世は二人が眠れるようにしつらえる。

「電気、消しますわね」常夜灯の柔らかなあかりからも隠れるように、知世は母鈴と並んで、ソファに横たわった。

それから数分、二人とも何一つ物音を立てなかったけれど、手が触れあつくらいに近づいて寝ていたから、お互いにまだ眠っていないのが、また眠るつもりもないのが判っていた。

「大道寺さん」体を起こして、先に声を出したのは母

鈴だった。

「はい、なんでしょ」

「好きな人いる？ …いるわよね」

「はい」

「こんなに好きなのに、屈かない、伝わらない、そんな風に思うことある？」

「もちろん、ありますわ」

「そういう時どつしてるの？ もどかしくって、でもどうしようもなくって、考えれば考えるほどますますイライラして…」

母鈴がやつと話し出したのを見て、知世は微笑んだ。

「李君の事ですね」

「そうよ。小狼しかいないわよ。私をこんなに苦しませて」

「何があっただんですの？」

「けんかよ。いつものような。だって小狼ったら今朝

風邪っぽかったから、私がせっかく花梨酒を用意してあげたのに、そんなの学校に持ってくるな、ですって。信じられない。それで私も…私も…頭にきて…」

「母鈴はふたたび泣くむ。」

「たまたま李君の機嫌が悪いこともありますわ」

「そうじゃないの。いつもなの。私がなにか余計なこととして、小狼に邪険されて、それで怒って、その繰り返し。小狼の事信じてきたけど、凄く不安でしょうがないの。私小狼に嫌われてるんじゃないかって。不安だから小狼にかまってほしくて、いろいろしようとして、ますます嫌われて…もう嫌。何もかも嫌」

「母鈴ちゃん…」

母鈴の泣き顔の下には、とても悲しい表情があった。それを見て、知世の胸は激しく痛んだ。母鈴は傷ついていた。ひどく傷ついていた。

「もう何しても無駄。私が駄目な存在だから。邪魔な存在だから。私が何もしないのが小狼の幸せなの。私

がいなくなるのが小狼の望みなの。そうとしか考えられない」

耐えきれず、知世は母親のように、母鈴の肩を抱きしめた。母鈴は子供のように、知世の胸に顔を埋めて泣いた。

しばらくの間、母鈴は泣いていた。知世はそれをあやすように、抱きしめたまま背中をそっと撫でていた。母鈴はやがて気が落ちつくにつれ泣き止んだが、知世の体温が自分の慰めになると知って、抱かれるままになつていった。

知世はというと、やはり体に触れる母鈴の肌に強い愛情を感じていたから、そのまま母鈴を抱きしめていた。

「あたたかいわ」

知世の胸の上で、母鈴がささやく。

「やわらかくて、気持ちいい…。このままいてもいい？ 重い？」

「大丈夫ですわ。毎鈴ちゃんは軽いですから。安心してそのままお眠り下さいな。」

しかし二人はすぐには眠らず、お互いにしか聞こえない低い声で、いろいろな想いを打ち明けあった。求める愛と与える愛の違い、母親への憧れ、一人の夜の過ごし方…。話題いつまでも続いたが、声は途切れがちになり、やがて申し合わせたかのように、二人ともそれと知らずに眠ってしまった。

二人で一枚の毛布をかぶり、満ち足りた表情でぴつたりと知世に寄り添って眠る毎鈴の姿は、まるで拾われてきた子猫のようだった。

翌朝、いつもの時間に起き出した知世が窓のカーテンを開けると、外は霜が降りていた。毎鈴はいかにも寝不足で、朝御飯の仕度を済ませた知世が無理に起こ

した後も半分瞼が閉じていたが、電話を取り次がれて、それが小狼からと聞かされたときには、さすがに目が覚めた様子だった。

「…小狼？ わたし…うつん、わたしこそ、ごめんなさい…」

毎鈴は少しだけ話して、あとは学校でね、と電話を切る。

「先に謝られちゃった」

「李君、随分心配されたみたいですから」

「私をもっと余裕を持たないといけないのね」毎鈴はバツが悪そうに笑う。「好きになるって、大変だわ」

「とても大変で、とても楽しいことですわ」知世が答える。「頑張ってくださいませ。私も応援いたしますから」

「うつん」

毎鈴は知世の顔を眺めながら、首を傾げながら言った。「大道寺さん、随分嬉しそうね？」

「だって、母鈴ちゃんの元気が戻ったんですもの」知世は本当に嬉しそうに笑った。

やがて二人は慌しく制服に着替え、学校へと向かった。大道寺邸のメイドが片付けに入ってきたとき、誰もいなくなった部屋には、母鈴が身につけている香の匂いだけが、微かに残っていた。